夏祭りの後、
小さなラブホテルの一室でママと二人で濃密セックス
蜜のように甘く美味しいママのオマンコを
たっぷり飴のように舐めて愛した夜

蒸し暑い夏の夜。
ここは街の隅の方にある小さなラブホテルの一室だ。
エントランスにしても客室にしても、小さい割に高級感のある佇まい。
そして今、僕はフカフカのベッドの上にママと二人、裸でいる。

僕の眼前にはパカッと割れたママのワレメ。

中からジュクジュクのお汁があふれ出てきていて、たっぷりいくらでも舐め取ることが出来る。
そう言えば・・・・・・。
僕はさっきまでのひとときを思い出した。
トロットロのママのワレメを見ていて、僕はさっきお祭りの屋台でママと買って食べたお菓子を思い出したのだ。

かき氷やあんず飴のようにママのここはとっても甘そうで・・・・・。

今僕らがここにいるのは、僕らの住む街の夏祭りが終わった後だ。
僕らは祭りの後の静かになった街中を、少しひんやりした夏の夜風に吹かれながら祭りの中心部から２０分ばかし散歩をしてこのホテルまでやって来た。すぐそばに山がある静かな立地のホテルだ。

「ほら・・・・ゆっくり、たっぷり舐めて・・・シンちゃん・・」
大好きなママの一番恥ずかしい部分が眼前にある。

「ペチュロッ・・・・チュロッ・・・」

舌を下から上にゆっくり転がしてみる。舌の、肉厚の根元や中間部ではなく三角形にとんがらせた先端部で。
「ペチュ・・・チュロロルロッ・・・・」
今度は先っぽだけを小刻みに動かす。ほんの少し舌の先端部に触れただけなのに糸を引くように絡みついてくる、粘り気のあるオマンコ表面部の透明

な液。

「んはぁっ・・・んくふあぁぁんっ・・・・」

ママの全身が、体のほんの一部を舌で触れただけなのにビクンッと仰け反るように震える。

まるで巨大な機械を、小指の先っぽでも押せるスイッチで操っているかのよう。

「チュペロッ・・・チュブポポッ・・・チュルルッ・・・・」

今度は舌ではなく唇を少しとんがらせ、ワレメ全体を覆うように溢れているネバネバの液を吸い取るようにしてみる。強くはない。あくまで優しく微弱にゆっくり。

体験版はここまでです。

もし内容を気に入っていただけましたら、

続きを製品版でお楽しみいただけますと光栄です。